

日本人創案の地動説並に星霧説

江戸時代に於ける天然理學の天文に就て、簡単に記してみたい。私は、これは、殊に、日本での獨創力を認識する上に、参考になると思ふからである。

日本人は、初め、天文のことに關して、餘り西洋の影響を受けて居なかつたが、支那の天文や數學をうけて、これを消化し、日本獨自のものとした。

九州杵築藩の麻田剛立が、明和6年(1769年)に諸星運行の理を究め、大膽にも地動説を發表して、世間を驚かしたが、後、西洋から支那へ傳つた同説の原理と少しも變る所がなかつた。つまり、麻田の地動説は、彼獨自の發見であるが、今は彼の名さへ餘り知られてゐない。保井春海は、元祿15年(1702年)に「天文瓊統」を著してゐる。これは天體地經を説いたもので、古來の天文書に拘泥せずに、やはり彼れ獨自の觀察、研究になるもので、そのころの天文書としては、もつともすぐれたものである。そのころ、大阪の間重富が垂搖球儀、測食定分儀、測食定方儀等を發明した。これは外來の天體觀測器の不備を慨し、象限儀や子午線儀に改良を加へた外に、かゝる獨創の發明をなしたことは、注目に値する。

カントやラプラスは星霧説の創唱者の名譽を冠せられ、不世出の大學者と讃へられてゐるが、日本の志筑忠雄を大學者と云ふものはない。いや、志筑と云ふ名さへ聞いたことがないと云ふだらう。彼は長崎の一通詞だつたが、寛政五年(1793年)に宇宙起源論を發表した。これは、カント、ラプラスの星霧説と同説であつた。しかも(カントよりも少しおくれてこの新説を發表してゐるが)ラプラスよりも3年早く、自説を發表したので、全く彼の創見であつたから、當然彼にもカントやラプラス等と同様に、星霧説創唱者の名譽を冠しなければならぬ分である。この他に、三浦梅園、片山蟠桃などと云ふ人も、全く創意を以て地動説を主張してゐる。

又、帆船萬里は銀河を論じ、恒星をとき、太陽が恒星の1つにすぎないと云ふことを明かにし、太陽系を論じてゐる。

一方、文化年代の頃、近江の國友一貫齊が反射望遠鏡を製作し、これによつて太陽の黒點を寫生し、天文學の新しい道をひらいた。

このやうに、江戸時代に西洋の同學の影響をうけることなくして、又、時間的にみても大差なく、日本獨自の天文の新説が發表され、萬丈の氣を吐いてゐるが、惜しいことには、當時の國情が、この新説を異端の説として壓迫し、又は、かへりみることをしなかつたために、その後繼者を生むことなく、中絶の形で、明治維新を迎へてしまつた。明治維新は、傳統をことごとく破壊し、無

「和歌山星の會」會則

1. 本會は「和歌山星の會」と稱す
1. 本會は天文趣味の普及發達及び會員相互の親睦を期す
1. 本會は縣下在住の同好者を以て組織す
1. 本會は毎月一回例會を開催す
1. 本會は會務遂行上委員3名をおく
1. 委員は會員の互選とし任期は1ケ年とす
1. 會費は必要に應じて徴集することあるべし
1. 本會は隨時講演會又は觀測會を開催す
1. 會員は相互に圖書望遠鏡の利用を乞ふことを得
1. 本會は當分下記に事務所を置く

(和歌山市金龍寺町六 野村方)

(註) 事務上委員は臨時に東亞天文協會和歌山支部員にて一時的に行ひます。

「和歌山星の會」委員 (順不同)

東亞天文協會紀伊支部員	阪 田 晃
和歌山高商天文同好會員	{ 山 本 靜 雄
	{ 島 田 音 村
東亞天文協會紀伊支部員	野 村 秋 馬

(和昭14年11月25日現在)

六 月 例 會 報 告

本支部六月例會は六月17日20時より開催、小槇、野村、島田、木村、門等5名集合、2時半近く終了した。講習會開七の件は下記の條件にて行ふ豫定。

會期 八月3, 4日13時より
 會場 和歌山縣立圖書館
 講師 山本一清博士 “天文學の常識”

(2600, VI, 18. 野村記)

(第277頁より)

秩序に、無節操に、西洋の文物を取り入れて、本來の日本に生れた天然理學を全くかへりみることをしなかつた。さうして、明治12年、米人ポールが、土木の教授として來朝し、天文の講義をなしたが、當時の日本人はこれこそ渡來の新説として、よろこんでこの講義に耳を傾けたが、何ぞ計らん、江戸時代に、すでに、如上の天文の篤學者が世界に誇る新説を發表してゐたのであつた。

〔廣島の一會員〕(1940, 4, 8. 800 p. m.)